



仕事は教わるものではなく 盗み取るもの

板金屋「銅春」

8人の職人を抱える板金屋「銅春」の創業は1923（大正12）年。鍋釜などの金属日用品を修理する鑄掛屋からスタートして、今年で81年目になります。現在、銅春が扱うのは建築板金で、雨どいやベランダのひさしの取り付けが専門です。20～30年くらい前までは材料の加工から取り付けまでのすべてを板金屋がやっていましたが、今では分業化されファックスで注文すれば加工された商品が届きます。素材も、安価で加工が楽な塩ビや合金が主流となり、昔ながらの銅板を扱うことは少なくなったそうです。

板金屋の仕事は、金属を切ったり、折ったり、たたいたり基本。「道具をきちんと使いこなせば、どんな仕事でもできるはずで、応用はいくらでもききます。私の親方である父は仕事を教えてくれなかったから、人の仕事を見て研究して工夫してきました。今はマニュアル通りに組み立てるだけだから誰でもできる」と、2代目を継ぐ社長の河野康男さんは職



右が社長の河野康男さん。あちこちの現場で仕事があるため、日中に全社員が仕事場に集まる時間は少ない。

人気質を見せます。

仕事場の奥から銅版を出してきてくれました。別名「あか」と呼ばれてきたように美しい暗赤色が特徴です。ちょっと

した気温や湿度の変化で、すぐに色が変わってしまふ職人泣かせなこの銅版ですが、「昔のものをいつまでも残していきたい」と河野さんは言います。



左下から「さしがね」「まども」「けやき針」「つかみ」「柳刀（やなぎば）」「金槌」「やっこ」「かたな刃」「ひょうし木」。つかみ・金槌・柳刀の三丁道具があればほとんどの仕事ができるため、軒下での作業には必ず持って行けといわれる、いわば板金屋の命。



銅板のもようは、職人が木型をつくり、木づちでたたいてつくっていた。



左は煙突をつくるための道具。右は銅板を曲げる道具。



仕事場は主に近々控えた現場の準備をするために使われる。素材の寸法を測り、折って加工して下準備は完了。



市川市国府台と 松戸市矢切地区の文化交流

国府台・矢切街回遊展



2003年7月19・20日に行われた第6回目の街回遊展は、国府台と矢切が舞台です。「市川と松戸を結ぶ文化のかけ橋」を合言葉に国府台と矢切の文化を存分に体験してもらおうと、地元の人たちの協力ですさまざまな企画が盛り込まれました。

参加者一人ひとりが自由気ままに楽しめるのも街回遊展の魅力の一つ。中には、江戸川の散歩中にふらりとイベントをのぞきにきた人や、この機会に矢切まで足を運ぼうと綿密な計画をたててから回遊バスに乗り込む人もいました。

行政区は違えど、人々の交流に垣根はない！歴史ある自然豊かな国府台と、のどかな田園風景が広がる文学のまち・矢切を舞台に繰り広げられた街回遊展の一部をご紹介します。



1 和洋女子大学
360度見渡せるパノラマラウンジ
今回の街回遊展の舞台が一望できます。



2 辻切り
国府台を守るワラの太蛇・辻切り
悪霊や病気が村に入るのを防ぐための民俗行事。四辻で太蛇が眼を光らせています。



3 国府台小学校
市川の民話のついで
市川民話の会が披露した「里見の松の根っこ」という紙芝居は、国府台の田中酒店に今もまつられている松の根っこの物語。里見の戦にまつわる悲しいお話です。

4 国府台小学校 郷土学習室
ペーゴマに挑戦してみよう
ペーゴマを触ったこともない子どもたちは、地元のおじいさんたちのペーゴマにひもを巻く鮮やかな手つきにじっと見入っていました。



7 野菊の墓文学碑
文学散歩を楽しむ
伊藤左千夫の小説「野菊の墓」の一説が刻まれた碑。



5 里見公園 紫煙草舎
一緒に口ずさむ北原白秋の名曲
詩人・北原白秋が数年住み、その後小岩から里見公園内に移築された紫煙草舎に響く歌声。北原白秋が作詞した名曲「この道」「ぞうさん」などをいちかわ童謡の会が歌いました。



6 矢切の渡し
ゆったりと江戸川を渡る船
江戸時代初期に始まったと言われる矢切の渡しは、江戸川を挟んだ矢切村と柴又村の住民に欠かせない渡し船でした。運行が終わる日暮れ前までに矢切と柴又を往復しようと、夕方まで行列は途絶えませんでした。